



阪神淡路大震災から23年 ～命について～

昨日の全校集会で、子どもたちに聞いてもらった話です
自分の命は、自分ひとりのものではないということを
少しでも感じてもらえたらと思います



この1月17日で、阪神淡路大震災が発生してから23年になります。みなさんが生まれるずっと前のことだから、おとうさんやおかあさんに話を聞いたり、映像で見たりするくらいであまり実感もわかないでしょうが、マグニチュード7.3というとても大きな地震で、震源地からずいぶん離れたここ岸和田でも先生が今まで経験したことがないようなくらいに揺れ、特に神戸などには大きな被害をもたらしました。死者6343人、いまだに行方不明の方3人。一瞬のうちにその人たちの未来が奪われてしまったわけです。だから、先生は毎年、この日は「命」について改めて考えたいと思っていますし、そういったお話をみなさんに聞いてほしいと思っています。

今日は、先生の子どもの話をしたいと思います。先生には、二人の息子がいて、今25歳と22歳です。もう上の息子は社会人で仕事をしているのですが、その息子が生後8か月の時にとっても大きな病気にかかりました。「川崎病」といって、もしかしたら、みんなのなかにも赤ちゃんのときにかかった人がいるかもしれません。「川崎病」は、いまだに原因不明の病気で、主に生後1歳までにかかり、40℃くらいの高熱がでて、目が充血し、リンパ腺がはれ、舌がイチゴのようになったりする特徴的な病気です。何よりもこわいのが心臓の血管にこぶのようなものができることがあり、そこに血液がたまと破裂してしまっただけで死んでしまったりすることです。ただ、原因はわからないのですが、特効薬は、もうその当時見つかっていて、ガンマグロブリンという点滴を5本くらい打ってもらってと症状は治まるといわれていました。ですから、先生の子どもも市民病院に入院していたのですが1週間くらいしたら退院できるだろうといわれていました。ところが、点滴を5本打ってもらってもなかなか症状が治まらず、熱も下がりません。そのうち、脈まで乱れてきて面会謝絶になってしまい、病院の先生にこのままだと命の保証もできないので、専門の先生がいるもっと大きな病院でみてもらったほうがいいと言われ、近大病院に救急車で移ることになりました。先生は、救急車のなかで点滴につながれた子どもを抱っこしながら、もしかしたらこのまま死んでしまうのではないかと、涙が止まりませんでした。そして、何とか近大病院に到着し、もう少し点滴を打って様子をみようということになりました。すると2日ほどたったら、だんだんと熱も下がり始め、元気がでてきたのです。病院の先生の話では、他の子どもたちよりも症状が重くて病院をかわったところが一番のピークだったのだらうとのことでした。3週間くらい入院して無事退院できました。心配していた心臓のほうも中学校を卒業するまで定期的にみてもらっていましたが、何事もなく、運動も普通にできます。

近大病院では、心臓小児科の病棟に入院していたので、同じ病室の子どもたちは、生まれつき心臓に病気をもった赤ちゃんばかりで、みんなこれから心臓の手術を受けることになっていました。先生は、自分の子どもが川崎病にかかった時、「なんで自分の子どもだけが・・・」とくやしい、悲しい気持ちしかなかったのですが、同じ部屋の子どもたちやおかあさんを見ると、先生の子どもよりもっと大変な状態なのにみんな明るく前向きに病気と闘っているの、そんなことを思っていた自分が恥ずかしくなりました。先生の子どもは手術は受けなかったの、他の子どもたちよりも先に退院することができました。「また、通院で来た時にお見舞いに来るね」と言っていたので、病室を訪れると、同じ病室だったひとりの赤ちゃんが手術中に状態が悪くなり、亡くなったことを知りました。その赤ちゃんは手術を受けるために鳥取から大阪まで来ていたのですが、亡くなった赤ちゃんを棺ではなく、おかあさんが胸に抱いて帰られたと他のおかあさんからお聞きして、声になりませんでした。

『こころのふしぎ なぜ? どうして?』という本のなかで「人が死ぬってどういうこと?」というページがあり、こう書いてあります。「人間は一人では生きていけません。だからたくさんの人とつながって助け合いながら生きています。家族や仲の良い友だちなど自分と関わりの深い人とは太いリボンでつながっています。でももし死んだら、つながっていたリボンは一瞬で重いくさりに変わります。残された人たちはそのくさりの重さに耐えながら、このあとずっと生きていくことになります。人が死ぬということは、その人だけでなく、その人とつながっている人を悲しませることになるのです。だから人を殺してはいけないし、自分で自分を殺すのもいけないことなのです。」と。

どんなに生きていたいと思っても、こればかりは自分の思い通りにはなりません。思いもよらない病気になったり、事故や災害にあうことだってあります。でも命のある限りは絶対に生き通さなければなりません。自分のためにも自分とつながっている人たちのためにも。命とはそういうものだと思っています。